

～消えぬ銃の傷跡・核の記憶～

2007MIC 長崎フォーラム開催

8月8日に長崎市でMIC長崎フォーラムが行われ122名が参加しました。今年は「～消えぬ銃の傷跡・核の記憶～核のない世界を！ 2007MIC長崎フォーラム」を主題として伊藤前長崎市長射殺事件の検証や被爆体験の継承について改めて考える集会となりました。

まず最初に長崎マスコミ文化共闘会議を代表して中野議長代行が挨拶を行いました。

久間前防衛大臣の「原爆投下はしょうがない」発言問題にも触れ、「本当に原爆投下は必要だったのか。さらに二発目の原爆は本当に必要だったのか」と訴え、原爆投下の歴史的意味を今こそ問い直す必要性を強調しました。

次に前岐阜県御嵩町長の柳川喜郎氏が『沈黙は共謀、傍観は加担～危険な「暴力」の風潮～』と題で基調講演を行いました。柳川氏は元NHK解説委員。1995年(平成7年)に岐阜県御嵩町長就任。3期12年にわたり町政を担い、今年4月に引退。岐阜県内町村初の情報公開条例を制定し、住民に開かれた町政を展開。前町長時代からの産業廃棄物処分場計画を凍結。1996年9月に自宅盗聴事件が発覚し、盗聴事件の捜査段階の翌10月に襲撃され重傷を負った経験があります。

自らの町政経験や襲撃された体験を踏まえて、言論テロについて語り、伊藤前長崎市長射殺事件についても言及しました。会場には同じく銃撃された経験を持つ本島元長崎市長も講演を聞きに来られていました。柳川氏は「毅然として態度で行政対暴力を許してはいけない」と訴えました。長崎の地元メディアも柳川氏の発言に注目し、会場で



の取材を行っていたことも印象的でした。

続いて「長崎市長射殺事件の経過と波紋」として長崎新聞の森永記者が基調報告を行いました。今回の事件でいくつかの課題が浮かび上がってきました。「行政対暴力の深刻化」「暴力団と地域」「銃器の蔓延」・・・森永氏からは「暴力を許してはいけない。今こそ私たちマスメディアの報道の在り方も問われてと思います」という報告がありました。

その後に柳川氏・森永氏と会場との質疑応答がありました。同じメディアの現場で働く記者から次のような質問が出ました。

「原爆慰霊祭で広島市長・長崎市長の平和宣言が、全国で新聞の一面で掲載されます。普通ならば、一地方自治体の首長の言葉が、一面を飾ることはありません。その重みについて地元メディアはどうとらえていますか？」森永氏は「被爆都市として何を問われているかを常に意識しながら、報道していく責任を感じています」という回答がありました。対照的に久間発言の「言葉」に対する無神経さについて批判の声もあがりました。

休憩を挟んでドキュメンタリー「二重被爆」の上映を行いました。1945年8月6日広島、8月9日長崎に原子爆弾が投下されました。その被爆者の中に、広島と長崎の両市で被爆した方々がいます。『二重被爆者』の存在は歴史の中に埋もれたまま、独自の聞き取り調査もなされていません。その両市被爆を『二重被爆』という概念で捉え直し、取材したドキュメントです。

「戦争終結のため」という美名のもと、人間を



平和散歩

破壊しつくす原子爆弾をわずか3日間、75時間しか離れていない時間帯で2都市に投下する意味はあったのか？ 原爆投下の歴史的意味を再び問い直す作品です。

上映後に出演者の山口彊（つとむ）氏に被爆体験を語っていただきました。山口氏は1916年（大正5年）生まれの91歳。昭和20年、設計技師だった山口さんは、広島に長期出張。8月6日朝8時15分、広島造船所に出勤途中に被爆。大火傷を負い翌日、同僚の岩永さん・佐藤さんと共に避難列車で長崎に向かい、一昼夜かけ8日昼に長崎駅に到着。翌9日朝、長崎造船所に出向き、広島の惨状を報告中に二度目の被爆をしました。

2006年3月完成の記録映画「二重被爆」出演を契機に、国連での講話や地元高校生への語り部活動など、今も原爆の悲惨さ反核兵器を訴え続けています。2007年7月、講談社より『生かされている命～広島・長崎「二重被爆者」、90歳からの証言』を刊行しました。



稲塚秀孝プロデューサーに聞き手を務めていただいて、山口さん自らの被爆体験を語っていただき、それぞれ会場からの質問にも答えていただきました。

次に「『MIC 長崎フォーラム』アピール案」の提案があり、拍手で採択を行いました。最後に橋田MIC事務局長が閉会の挨拶を行いました。

集会終了後、交流会も行われ講師の柳川氏夫妻も参加していただきました。地元との交流を深めました。NBCの平野妙子さんから、爆心地公園の「長崎誓いの火」についての説明もありました。その結果、「世界のどこでも決して核戦争を起こさず、長崎が最後の被爆地であり続けるように」との願いを込め、1983(昭和58)年8月、ギリシャのオリンピアの丘で採火された「長崎誓いの火」が今でも点されています。しかし、ガス代などの維持費用もあります。平野さんの訴えに参加者からカンパが行われ、平野さんにカンパ金を手渡されました。(写真：交流会での平野さんの訴え)



翌8月9日、長崎新聞労組の平和委員会の案内で平和散歩が行われました。午前9時すぎに長崎新聞前から出発、散歩コースは一本柱鳥居→山王神社→旧長崎医科大正門→浦上天主堂→鐘楼ドーム→如己堂を回って平和公園を通過して爆心地公園までのおよそ1時間半のコースでした。

一本柱鳥居(被爆鳥居)は爆心地から南東約800メートルの距離にあり、爆風を平行に受け片足をもぎ取られた鳥居です。

山王神社境内には被爆クスがあります。原爆によって幹が焼かれましたが、再び芽吹き長崎の被爆から復興の象徴となりました。

長崎医科大の正門は原子爆弾の爆風のすごさを示す数少ない遺構の一つです。傾いたままに残されています。

(写真：旧正門の説明) 浦上天主堂は一部側壁を残し炎上、全壊しました。参加者は、戦後に再建された天主堂を参観し、少し下った所にある爆風で飛ばされた鐘楼も見学しました。



如己堂は放射線医学者として、カトリック信者として、そして父として平和を訴え続けた永井隆博士の旧居です。2畳1間の家で博士が亡くなるまでの3年間、2人の子どもとともに暮らしました。博士は亡くなる直前まで「この子を残して」など多くの名著を世に送りました。

(写真：如己堂の説明) それらの遺構をめぐって、原爆投下時刻前には爆心地公園に到着しました。11時2分の投下時刻を告げるサイレン音とともに黙祷を捧げました。



参加者を代表して、全下野新聞労組の島野さんご一家が献花を捧げ、恒久の平和と核兵器の廃絶を祈念しました。

(写真：代表献花)



なくせ核兵器！2007MIC 長崎フォーラムアピール

イラクで戦争が終わりません。米国が始めた戦争です。しかも、米国が開戦の大義名分とした大量破壊兵器は結局ありませんでした。この戦争に日本は加担しました。それは今も続いています。戦争協力は日本の普通の姿になってしまいました。怒るべきときに、私たちは怒ってきたでしょうか。鈍感になっているのではないでしょうか。

いつの間にか核兵器保有や使用への危機感が薄らいでいます。核保有が米露英仏中の5カ国だった時代はとうに去りました。「小型・高性能」の弾頭開発が進んでいます。劣化ウラン弾は実際に使われています。本当の核爆弾が使われる日が迫っているのでは、と強く危惧します。

久間前防衛相の「原爆投下はしょうがない」発言は核兵器を容認し、日本が核武装へ進む危うさをはらんでいます。被爆地・長崎選出の国会議員の言動は、被爆者の願い、運動を冒涇するものでもあります。

また、安倍政権は教育基本法を改悪し改憲手続法(国民投票法)を成立させました。これは平和憲法を改悪し、「9条」を潰してしまおうとする動きと一体のもので、日本を再び戦争へ引きずり込もうとする策動に、私たちは敏感に反応しなければなりません。

日本は、またかつての過ちを繰り返そうとしているようにみえます。歴史の意図的な歪曲です。沖縄での集団自決は「軍の強制ではなかった」と教科書を書き換え、従軍慰安婦についても過去の悲参な歴史を覆い隠そうとする動きが頭をもたげてきています。

戦争や核は最も憎むべき暴力です。暴力は多様に現れます。私たちが暮らす日本の街にもあふれています。今年、核兵器廃絶を唱えた長崎市長が、凶弾に倒れました。許してはならない蛮行が被爆地で起きてしまいました

敏感になりましょう。なぜ暴力が止まないのかを追及し、あきらめずに怒りましょう。戦争も核も、あらゆる暴力を許さない気持ちを共有しましょう。

被爆者の闘いを指針とし、地球上から核兵器を廃絶する道を着実に進んでいきましょう。

過去の歴史を直視し、戦争へつながるあらゆる動きを阻止しましょう。

日本政府に非核三原則の法制化を求めましょう。

ここ長崎から、戦争と核を憎み、暴力に反対するメッセージを世界に発信します、この呼び掛けを「MIC長崎フォーラム」のアピールとします。

2007年8月8日

MIC長崎フォーラム参加者一同
日本マスコミ文化情報労組会議
長崎マスコミ・文化共闘会議

07 沖縄反戦ティーチン参加者募集

MIC は平和のための行動として、沖縄県マスコミ労協が主催している「反戦ティーチン」に参加いたします。集会に参加し、翌日は基地視察や沖縄戦の戦跡をめぐる予定です。MIC として、沖縄のマスコミ労働者と連帯して「基地のない沖縄、基地のない日本」の実現に取り組むことをあらためて確認する場にもなります。各単産・単組からの積極的な参加を要請します。

日時:2007年10月13日(土)~14日(日) 1泊2日

会場:おきでんふれあいホール

沖縄県那覇市旭町114-4 おきでん那覇ビル2F(ゆいレール旭橋駅 徒歩5分)

参加費:(交通・宿泊は各自手配)

フル参加:10,000円

含まれるもの:反戦ティーチン会場費、13日交流会費用、14日バス代・14日昼食弁当代

13日交流会から参加:8,000円

含まれるもの:13日交流会費用、14日バス代・14日昼食弁当代

14日から早朝から参加:3,000円

含まれるもの:14日バス代・14日昼食弁当代

現地スケジュール

13日(土) 13:30 反戦ティーチン受付開始

14:00~反戦ティーチン(詳細は検討中)

基調講演 むの・たけじ(武野武治)

1915年秋田県横手生まれ、報知新聞社を経て朝日新聞社に入社。45年「戦争協力」の責任上、記者全員の退社を主張、8月15日付けで辞表を提出、退社した。48年、秋田県横手市で週刊新聞『たいまつ』を創刊、約30年間、同紙の主幹として81年の休刊まで780号発行し、その後も、平和運動について積極的な発言を続けている。

17:30~終了

18:30~沖縄県マスコミ労協の仲間と交流会

14日(日) 8:30~受付開始

9:00~**点呼確認・事務局説明・出発**

バスで移動開始

基地視察~戦跡見学

17:00 バスツアー終了

17:30頃 那覇市内到着(市内観光・市内での夕食組は降車)

18:00頃 那覇空港(最終解散~そのまま飛行機搭乗準備)

締切:2007年9月25日(月) 問い合わせ・申し込み先は下記

日本マスコミ文化情報労組会議 事務局・山下

文京区本郷4-37-18 いろは本郷ビル2階 TEL:03-3816-2988 FAX:03-3816-2993